

パラダイムとしての「アフリカ小農世界」

誌名	農林業問題研究
ISSN	03888525
著者	杉村, 和彦
巻/号	42巻4号
掲載ページ	p. 330-338
発行年月	2007年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



第Ⅲ報告

パラダイムとしての「アフリカ小農世界」

— 農林経済学の 20 世紀のアポリアを超えて

杉村和彦*

The African Peasant World as a New Paradigm: Beyond the Apories of 20th-Century
Agricultural and Forestry Economics

Kazuhiko Sugimura (Center for Arts and Sciences, Fukui Prefectural University)

The purpose of this presentation is to re-evaluate the African peasant world as a new paradigm that can break the impasse in which agricultural and forestry economics is currently mired. The discussion here will focus on two characteristics common to all 20th-century social sciences, including agricultural and forestry economics: (1) the principle of “productivity first”, which is based on the idea of *homo economicus*; and (2) the state-centered way of thinking.

Today, interest in agriculture and rural life is growing rapidly among people all over the world, especially among city dwellers who are keenly interested in food safety and environmental issues. This situation requires that agricultural and forestry economists should formulate new values and ideas. The fact is, however, that most of them are still bound by paradigms of the 20th century: they still cling to the myth of “productivity” and overemphasize the role of the state. Consequently, the gap between the needs of the

general public and the interests of agricultural and forestry economists is widening. Thus, in order to fill this gap and to make an actual contribution to society, agricultural and forestry economists must establish a new paradigm that meets the current needs of society.

In this context, the African peasant world is worthy of notice. The African peasant world has been always considered as the most backward place on earth. But today it is very important and meaningful to us in that it is one of the few places in the world where the “economy of sharing”, which attaches more importance to social reproduction than to material production, still operates powerfully. In this respect, I believe that the African peasant world will serve as an important frame of reference for agricultural and forestry economists when they try to establish a new paradigm that meets the current needs of society, such as the need for “human development”.

1. はじめに

「農林経済学」あるいはそれを支える「農林経済学者」が混迷の場に立たされているという。しかしそれは具体的にどういうことを意味するのだろうか。今日農業・農村は、これまでのアカデミズムの枠組みを超えて、むしろ多くの人に注目されているといってよいだろう。例えば、近年、食料の安全・安心問題、食育といった課題も注目されるようになるとともに、また農村、農業問題への地方自治体と

地域住民、NPO、ボランティアとの参画と協働といった事柄も存在する。一方グリーンツーリズムなどの中で、「農村」「田舎」を扱う雑誌が多くの人に読まれている。また農村内部にもかつてのような均質性の高い農民像ではなく、それぞれ個性を持った、「おもしろ」農民が増大している。しかしそのような活況を呈する農業・農村現象の中で、研究者だけは「取り残されている」というわけである¹⁾。

本報告は、この「取り残された状況の中にある研究者」という状況を「学」のパラダイムというところにおきなおしてみても再検討する。パラダイム²⁾とは、「科学史」の中で、その時代、社会において一

* 福井県立大学

つの分野に属する学者のほぼ全員が共通の大前提として認めている研究の基本的方法や問題意識であり、学者集団の使命をかたち作り、研究という営為を鼓舞する。しかしそういうパラダイムのもとに思考を制度化され、拘束されるがゆえに、時代の大きな変化の中では、そうしたものによる拘束から比較的自由な人たちと比べて、前の時代の思考に拘束され、時代に取り残される可能性も大きいともいえる。

本報告において、報告者は、「アフリカ小農世界」という場から出発する。この「アフリカ小農世界」こそは、20世紀の農林経済学のパラダイムから無視され、後れた世界と指弾され続けられると同時に、その学による処方まったく及ばない世界として、今日世界大の問題を形成しているからである。しかしそれゆえにこそ、その苦しみの中から自分たちの壁となり、一方で自分たちもとらわれてきた20世紀のパラダイムを越えようとする新しい動きも、他の地域に先駆けて胎動しているともいえる。本報告では、アフリカ小農の研究上のアポリアを手がかりとして、「生産力」と「国家」を基調とした20世紀の農林経済学のパラダイムの特質と限界を検討し、それを越える21世紀の新たなミッションを展望する。

2. アフリカ農業・農村問題と農林経済学のアポリア

(1) アフリカ問題

まず「アフリカ問題」という問題を考えてみよう。

アフリカ諸国に対して様々の国際的機関や各国政府の援助協力が続けられているが、援助対象となっている途上国の中においてアフリカ農村の停滞ぶりは突出したものとなっている。そしてこの停滞は南の国の間の内部差としての「南南問題」をアフリカ諸国へと集中させ、今や世界の中にアフリカ問題を生み出そうとしている。この「緑の革命」を拒否し、成長しない農業は、メイズ土地生産性の地域別推移を見た、平野が示す図1の中にその具体像を認めることができるだろう³⁾。

グローバリゼーションが進行する中、アフリカにおいても商品経済が浸透する一方で農業生産の近代化がなかなか進まない背景に、アフリカ農村に独特の農民経済のメカニズムがあることは、今日世界中の研究者と援助関係者の認めるところであり、その解明が緊急の課題となっている。アフリカ農村研究の中でこうした問題に一つの視角を与えてきたものは、ゴラン・ハイデンの“情の経済”論というアフリカ農民の行動特性をめぐるモラル・エコノミー論である。

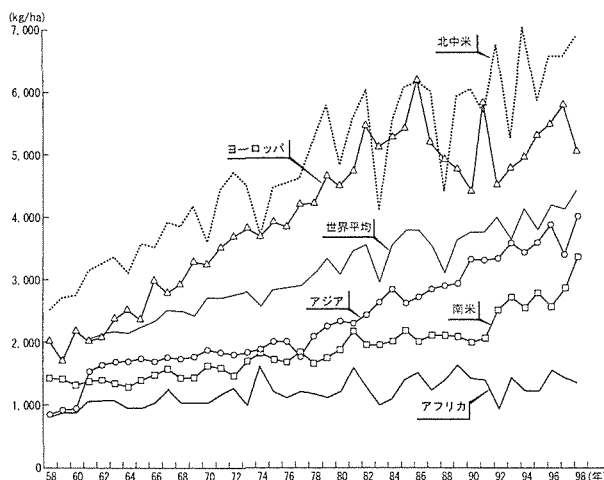


図1. メイズ土地生産性の地域別推移

出典：『図説アフリカ経済』平野克己著（日本評論社） 出所：FAO [1962-2001a] より作成。

(2) 情の経済と「捕捉されない」農民像

「情の経済」⁴⁾とは「血縁、親族関係、コミュニティ、あるいは宗教のような親和的關係によって結ばれた集団による扶養、意志疎通、相互作用のネットワーク」であるが、アフリカには、このような情の経済に支えられた生存維持を志向する小農世界が広範に生き続けている。彼らは「市場や国家」についても反対している頑迷な農民というわけではない。時には市場からの利益を受け取るのであるが、それに取り囲まれてしまい、自らの「自由」を放棄することがないのである。

これに対して、市場や国家が思い通りに扱えない、このような気ままな、そして時には上からの誘導に離反した行動を自由に展開するのが、ハイデンの語ろうとした、情の経済に支えられて活動する「捕捉されない」自由な、自立したアフリカ農民の姿である。しかもそれは外部世界が及ばないという形ではなく、商品経済が同じように流入しながらも、そこでは他の地域社会と比較したとき、こうしたしたたかな小農世界が、相対的に高い形で維持されている。そしてアフリカでは他地域社会と比較して、厚い生存維持的な小農世界が、より安定的に維持されたがゆえに、停滞状況が再生産しているとするのである。

(3) アフリカ問題と農林経済学のアポリア

しかし以上のような、ハイデンの「捕捉されない」農民像は、それまでアフリカの低開発性を見つめる人が一様に持ってきた、「捕捉された」あるいは「捕捉されうる」農民像に対する、極めて論争的な意味合いを持つものであり、それゆえきわめて厳しい批判にもさらされてきた。

一つの論争視点は、従属論的視点との対峙である。アフリカ農民は貧困で停滞しているがゆえに、他の地域よりも「捕捉しているはず」だというマクロな視点からの思い込みに対して、ミクロな視点からアフリカの農民の存立状況へと目を向けさせ、地域的動態の多様性をとらえられない、従属論的視角の限界をアフリカ地域研究から明らかにしようとするものであった。

もう一点は、価格による操作や誘導を適正なものとするれば、自ずから市場に〈すり寄る〉ような、本質的には企業家である小農世界を想定する。またそれを背後から支える国家による政策に対しても、従順に対応する農民像が前提となる。このように「捕

捉されない」農民像は、これまでアフリカ小農世界にも適用されようとしてきた、開発論、その前提としての経済学における、新古典派的世界に生きる農民像に対して、懐疑の目を向けるのである。

1960年—1970年代、「緑の革命」の中で、東南アジア、南アジアの農村において農民は、急速に生産性を向上させ、農村内部に大きな変容をもたらした。その時、その革命の導きを主導したものとして、農林経済にかかわる学問は高い評価を受けた。しかし、アフリカ諸国においては、上記の地域と同じようにはなっていない。アフリカ諸国においても同様に、様々の国際的機関や各国政府の援助協力が続けられてきたが、「緑の革命」は拒否され続け、アフリカ農村の停滞ぶりは突出したものとなっている。そこでは、世界が目指す問題に、農林経済にかかわる学問は、ほとんど何の貢献もできず、手をこまねき、こうした事態を従来の農林経済学が「捕捉できない状況」が生み出されている。

3. パラダイムとしての「アフリカ小農世界」

—農林経済学の 20 世紀のアポリアを超えて

(1) 情の経済と経済人類学的視点

このようなハイデンが提唱する「情の経済」に生きるアフリカ農民の作り出す現象を把握することの困難さの中には、これまでの開発経済学の中での研究者が想定していなかった農民の慣習的行為にかかわるものとして、アフリカ農村のフィールドの中で再発見されてきた、以下のようなことがあると考えられる。これらの成果は、経済人類学的研究の中で蓄積されてきたもので、アフリカ小農世界を培地として、そこから学びとられてきたものである。

1) 分与の経済

その一つが、「ものを分ける」農民の像である。このような農民像をイメージ化するのに、ここではまず、筆者が集中的に調査を行ったザイル(現コンゴ民主共和国)のクム社会を取り上げてみよう。クム社会では、5-10 世帯による毎日 2 度の共食慣行が行われ、商品化が進む今日においても「食」の共有と平準化が実現される。クム社会においては「食物は分けられるべきもの」であり、富者は貧者に分けなければならないというモラルが強く社会を規定している。これはこれまで分与、親切なもてなし等のかたちで、「純粋な贈与」と呼ばれてきたものの中

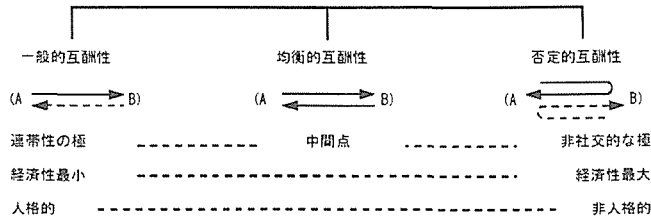


図2. サーリンズの互酬性のタイプロジー

に紡がれる人と人の相互の関係性である。

サーリンズはこれを「一般的互酬性」と名付ける⁵⁾。これに対して受け取ったものの慣行的等価物を遅滞なく返報するような互酬性を、サーリンズは「均衡的互酬性」と名付ける。

いわばわれわれの世界の公理ともいえる“give and take”の原則である。またサーリンズは一般的互酬性の対極に、他者を犠牲にして最大限の効用を得ようとするようなもののやり取りを「否定的互酬性」と名付ける。

図2は上記のことを図化したものである。従来アフリカ研究の中で、「平等主義」というかたちで指摘されてきたことがらには、上記の互酬的慣行の中では、一般的互酬性が卓越する社会の形である。これはとりわけ狩猟・採集民の典型をなすものとみなされてきたが、アフリカの人類学的研究の多くは、牧畜民・農耕民社会においても一般的互酬性の特質の強い社会の様態を明らかにしている。こうしたアフリカ農村における互酬性の様態は、スコットが東南アジア農村において見出した均衡的互酬性を前提とした社会のあり方とは大きく異なるものといえよう。

2) 人間の再生産（マルクス主義経済人類学）

もう一点は、土地よりも親族関係の中に、経済の一義的な基盤を置こうとする農民像で、その中では、人間関係を拡大する婚姻に経済の規模を拡大する主要な契機をとらえる。そのような例として、クム社会の研究過程で驚いたのは、勇壮な焼畑を行う村の中にいる、一見小さなとるに足らないような山羊の極めて大きな経済的価値であった。この山羊は〈生業〉としての役割をほとんど持ち合わせていないが、〈婚資〉として、きわめて高い価値が与えられている。

人間の再生産の場での「人と人」の関係をつなぐ領域の中に、制度化された価値の領域として、「社会的富」として家畜を使うことは、サバンナ地域の

中の農・牧民研究の中で、とくに牛などの大型家畜を対象としたものとして議論されてきた。しかしこうした大型の家畜がないサバンナの乾燥疎開林地帯においても、またクムのような熱帯多雨林の焼畑社会においても山羊、ヒツジなどの家畜が飼われており、そこでは小家畜でありながらも農・牧民における牧と同じ役割を果たしている。そしてこれは、膨大な家畜を婚資として贈るアフリカの牧畜民の社会システムとその中での家畜に対する高い価値意識のあり方と連続するものを有している⁶⁾。

このような物的生活を示す生業の内部ではなく、社会的富として「人間関係」をたぐる価値領域の中に自らの生活の一義的な目標を置くアフリカ小農世界のあり方は、一義的に「生産が目的」となる社会ではない。まさにそれは「人間の生産が目的」であるというような世界であり、そこには経済人類学の立場から指摘されてきたような「人と土地」よりも「人と人」の関係が先立つ世界が浮かび上がってくるのだということができよう。

3) 「情の経済」と消費の共同体

以上のような“情の経済”に支えられたアフリカ農民の家族経済の組織原理の差異は、それを支える共同体の次元でも、アフリカ農村とそれ以外の地域社会の農村というかたちでの大きな質的差異を作り出す。たとえば日本の村落社会においては、土地は希少であり、成員の制限が厳しく指摘されており、土地の保有形態に併せて村落社会の社会的組織化がなされるという側面が強い。

しかしこれに対して焼畑を軸としたクム社会においては、社会集団と「土地保有地」との関係は極めて希薄なものといわなければならない。クム社会においては村人の村落への帰属、あるいは成員としての権利は、「ともに食べる」ような人と人の関係が定まり、その結果として土地利用のような生活上の

諸権利が生みだされてくる側面がある。

このように見ればクム人が生きる世界は、コメ作りを主体とした「生産の共同体」としての日本のムラと対比するならば、まさに作られたモノを分配していく過程の中に作り出されていく「消費の共同体」と呼べるのかもしれない⁷⁾。そして、村の一人一人の豊かさはともに食べられる関係をどれだけ維持しているのかということによって基礎づけられ、彼らはこの人間関係を耕すために、多くの時間を費やして、友人や親族を訪問する。そこでは「ともに食べる」という中に人と人の関係はたぐり寄せられ、そこに「共同性」が作られてゆく。

図3は、以上のような共同性のアフリカ的特質を農民の生活世界のあり方との関係で捉えたものである。図3の中に示されるように、「人と人」の関係の中には、たしかに生産一労働の局面の中に形成されるものがある。このようなものには、日本の伝統農村の中では、水がかりなどの共同労働などが挙げられるだろうが、会社勤めの人達が日々行う仕事も、その中で人間関係の構築がその中で求められるのであり、しばしば「人と人」の関係の中での信頼感が高い生産力を作り出す源にもなる。

しかし一方で、「人と人」の関係としての相互行為には、図3の中に示されるように、上記のような生産一労働過程の場面とは異なる次元に展開するものがある。図3に示されるように、人間の再生産のための物質の消費の場としての家族や社会的再生産の場としての消費集団の再生産過程を生み出して行くための相互行為がある。人は信頼関係のある家族

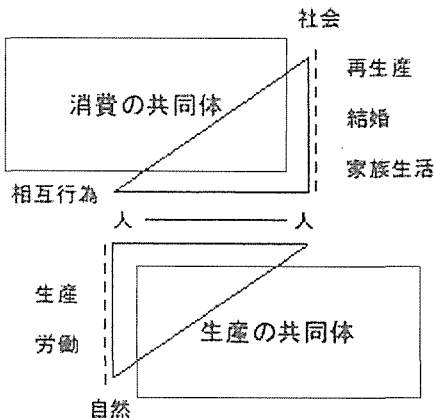


図3. 生活の組織原理と消費の共同体・生産の共同体

や地域社会を再生産していくために、ことあるごとに尋ねたり、贈り物をして、その信頼関係を確認していく。

アフリカ小農世界では、この「社会的再生産」の場の人と人の関係を生み出すための婚資などの〈社会的富〉の領域にしばしば大がかりな制度化したシステムを作りだし、大きな経済的価値を与えてきた。そしてこのような社会的再生産の過程の中に一義的な位置づけがなされる、アフリカ農村における「人と人」の関係の中には、その裏側では、常に食べ物は「分けるのが当たり前」というようなサーリンズのいう一般的互酬関係が展開することになっているのである。

(2) アフリカ小農における近代との乖離の意味

以上でみてきたようなアフリカ小農世界の研究の中で展開する「学」のパラダイムとフィールドとの乖離の意味をアフリカ小農のユニークネスを説明するものとして文明史的視角から検討しておこう。アフリカ農村の開発の場面で起こっていることの一般的な理解は、これまではさしあたり「近代一伝統」というパラダイムであった。アフリカ農村の開発の困難は、第三世界の農村の一部として段階的なものとして問題が把握されてきた。

しかしながら、この30年間の開発の経験は、図4-1に見るように、その問題を近代一伝統のパラダイムというかたちでまとめることの困難を生じさせ、伝統の質的内部差と近代との関係というかたちでの再検討することを要請している。ハイデン自身もこのようなアフリカ農村のユニークネスを指摘しているが、アフリカ農村域を狩猟・採集社会や、牧畜社会を含めて、共通した「困難の地域」として示すものが、下記のような上山の人類史の三段階論であろう⁸⁾。

上山は産業革命以前の世界を、紀元前4000年頃にエジプト、チグリスユーフラテス、インド、中国で相次いで成立した文明以後と文明以前に分かつ、

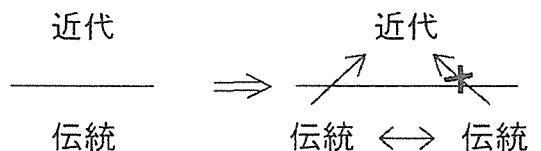


図4-1. 伝統間の差異と近代への適応

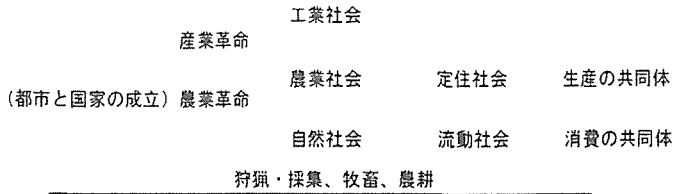


図 4-2. 社会組織の発展段階
(上山より杉村が作図)

上山によれば、文明以前の世界は、重層化の発達しない社会であり、上山はこのカテゴリーを自然社会と呼び、このカテゴリーの中には、図 4-2 に示されるように、狩猟・採集、牧畜、農耕社会が位置づけられる。

これに対して、文明以降の社会においては、重層社会が生み出されてきた。そして社会としては、これまでの流動的な血縁社会に対して、家族、地域共同体、国家という構造を持つ定住社会が生み出されてきた。

そしてこの「農業革命」以降の農業社会が、「定住社会」としてそこに富を蓄積する装置を作りだし、重層社会として国家に至る指向性を持ったのに対して、アフリカの多くの焼畑農耕社会は、「非定住的」な流動的社会としての特質を有している。

近代のパラダイムは伝統社会一般からではなく、重層化し、国家という制度に支えられて生み出されてきたものであり、農業社会が成立して以来、〈農学〉もそこに組み込まれて創出されてきた。もちろん「生産の共同体」も地理的、歴史的に作り出された地域ごとの固有の性格もあるが、今日近代世界システムが、世界大にひろがり、各地域システムを包摂していく中では、経済動態の地域的差異を含みながらも「生産の共同体」を背景とした社会が様々な地域差を孕みながらも離陸している。これに対して、自然社会の中には、貢納という制度のない社会での営農があり、自らの安寧は、一義的に横のつながりとその分与の経済の中に作られてきた。「消費の共同体」に支えられた、その徹底的に生存維持の方向に仕組まれた農業のあり方は、外部社会への余剰を作り出し、近代世界の中での商品化を進めていくためには困難なパラダイムをその学の中に内包している。

(3) 内発的発展と開発の価値規範、手法の転換
以上で見えてきたようなクムの中にも見える“情の

経済”論は、その議論の出発点においては、開発を阻むものとしての慣習的農民行動を明示化するものであった。しかし逆にいえば、その議論の前提はゆるぎない「近代」の一元的なあり方を想定していたともいえる。しかしハイデンをめぐる議論の間に進行したものは、途上国における開発理念のとらえ返し過程でもあったといえるだろう。

1) 情の経済と内発的発展論

すでに今日アフリカの開発の現場においても、従来の欧米型の開発論の限界への認識が広がり、もう一つの発展、持続的発展、内発的発展などの研究視角が現地の研究者の中で語られ、受容されるようになってきている。筆者がハイデン氏らと進めている、アフリカ・モラル・エコノミーに関する共同プロジェクトを基盤としたシンポジウムなどの中でも、こうした論点への言及がなされており、特にアフリカ人研究者の間には、こうした新たな発展の方向と伝統的な価値をつなごうとする関心が強い⁹⁾。またハイデン自身も新たな動向を受け止めながら、議論を展開しており、近代を超えるパラダイムとアフリカ小農世界とのつながりが語られる時代を迎えているのである。それゆえ今後アフリカのモラル・エコノミーも「内発性」の中心をなす価値規範や価値体系として再評価されていく可能性を秘めている。

2) 参加型開発という手法

同時に開発の場において、内部の視点、内部の価値に重きを置く、新たな開発の理念は、開発のプロセスにおいても、これまでの上意下達型的手法を批判し、徹底的なボトムアップの参加型という手法を第三世界の中に急速に進展させてきた。チェンバース¹⁰⁾などを嚆矢として展開された参加型開発は、大型の予算を使う政府開発援助の中でも使われており、コミュニティーベースの開発手法として、様々な形の展開が始まっている。

アフリカ農村開発においても、こうした開発手法の新たな理念は、すでに述べたような新たな開発理念に基づく開発のあり方と不即不離のものとして進展しており、開発における〈参加型〉の展開は、先進社会よりもむしろ様々な失敗を重ねてきた途上国の中に、より、先端的な試みと蓄積が展開していると見られる。

3) 開発をめぐるパラダイムの転換

以上のような開発の新たな動向の中には、開発の主体を地域の内部に置か、外部に置かかという問題だけでなく、開発をめぐる哲学のパラダイムそのものの転換を促す動きがすでに展開している。かつて開発とは、「経済開発」を意味した。しかしそうした〈物的生産〉の向上などに身をおく開発が必ずしも現場の事情に適合しないところから、「社会開発」という方向が探られ、今日、人間自身の多面的発達の可能性に目を向けた「人間開発」という開発の理念が提唱されている¹¹⁾。

そうした中でこの動きを支えてきた一人である、ノーベル経済学者のアマルティア・セン¹²⁾などが、これまでのホモ・エコノミックスの上に立つ経済学の限界を「合理的な愚か者」という言葉で厳しく批判したことはよく知られている。そして人間の安全保障を一義的に重視するような開発のあり方は、アフリカの村の中で、分け合うことを忘れず、「何が何でも生き抜く」、消費の共同体のモラルティと共鳴するものを有している。ホモ・エコノミックスの立場から唱導された農業近代化の方策としての「緑の革命」に対して、それを拒否したアフリカ農村のモラル・エコノミーにこれまで、開発の視点から「問題」と「困難性」が繰り返され、指摘されてきた。しかし今やそうした限定された開発の理念との関係を超越して、むしろ自然と人間の共存を可能にする「もう一つの緑の革命」に向けて、アフリカのモラル・エコノミーとの関係が新たに探られ始められつつあるのである。

(4) 農業・農村現象における価値転換と「取り残された研究者」ということの意味

1) 「生産力」という神話との決別の中で

以上を踏まえて、アフリカ農村研究の視点から最後に「研究者が取り残されている」という日本の状況にもう一度戻ってみよう。図 4-3 に示すように、日本の農業・農村は、今日においても産業社会の中

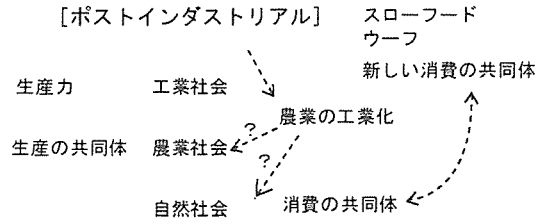


図 4-3. ポストインダストリアル・近代・伝統社会

に組み込まれ、それは、「生産力」と「国家」という 20 世紀の農学の基本的なパラダイムの中にかんじがらめになっており、今なお研究者はその中心にいる。しかし 20 世紀の近代の成功ゆえに引き起こされた、環境問題や南北問題への自覚は、これまでのパラダイムを越えていくことを要請しており、そこに大きなギャップが存在する。

これが「取り残された研究者」に「取り残された」ということを意識させる文明史的な背景だと考えられる。その中にはさまざまな動きの展開があり、もちろん日本の伝統への回帰という方向もある。しかし同時に、そうした動きの中には、〈伝統〉そのものとは異なる新しい何かを希求する動きを読み取ることできる。図 4-3 はこのことを図式化したものである。

まず興味深いことは、この動きが生産者サイドからではなく、消費者サイドから出ていることであろう。

そこには産消提携などを媒介とした、真の「消費とは何か」ということをめぐって、スローライフというような、これまでの「生産性」や「効率性」という 20 世紀のパラダイムを食い破る価値の次元を組み込み、「消費の共同体」に支えられたアフリカの社会とも共鳴する、現代的な「コミュニティ」をそこに作り出そうとする姿を読み取ることができる。

また、このような「生産力」を超える価値指標の中には、その一つとして、GNP (国民総生産量) という考え方に対する代案として、GNH (国民総幸福量) というような考え方¹³⁾も提起されている。

このような時代状況と農業・農村の関係を考える時、本学会もまた、時代の中に生きる実践的な学問を問う場として、自らの学問の目標値と対象の一つの転換が求められているようにも思われる。たとえば「食」を前面に掲げ、あくまでも生産の場を中心に掲げた「地域農林経済学」というパラダイムから

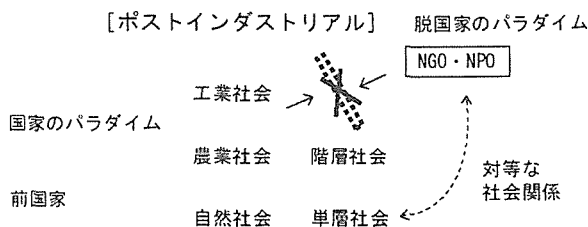


図4-4. 国家、NGO・NPOとアフリカ社会の位置

消費と生産をトータルに問う「地域食農経済学会」というようなパラダイムへと転換するかたちで、学会そのものの再構築を考えていく必要もあるのではないか。

2) 国家の学を超えて

そして同時に興味深いことは、そうした動きの中心的な担い手の中には、国家を超えて連帯するNGOや、国内にあっては非営利活動によって自発的な横のつながりの中で公共的な活動を担うNPOなどの中に、鋭い働きを見てとることができる^[4]。国家がその中心となって作り出してきた、近代の垂直的な組織原理とは異なる、横の連携を軸とした、新たなNGO・NPOの組織原理とそれに支えられた新たな学の胚胎を見ることができ、そしてさらに興味深いのは、これまで国内で活動してきた生活協同組合などの中にも、そうした動きに触発されて、フェアトレードなどに積極的に取り組み、国家を超えて南北問題の解決に目を向ける姿勢が目にとまる。一方国内においても横のつながりの中で、有機農業などの深い知識が広がっている。その動きの中には、国境も軽々と越えて、有機農業のボランティアとして渡り歩く、ウーフなどの非組織的な連帯があり、注目する必要がある。図4-4はこうした状況を図式化したものである。

「活況を呈する農業・農村現象」の中で、「取り残された状況の中にある」と研究者に感じさせること背景には、もう一つ、こうした「知」をつむぎだす組織原理の揺らぎ、重厚長大な20世紀のアカデミズムの体質が抱える困難が関係しているのではないかと考えられる。

アフリカ小農世界は、そもそもそうしたヒエラルキカルな社会の中での「知」を経験してこなかった。そこには対等な者としての教えあうというネットワーク型の知があり、ともに生きるという「消費の

共同体」に支えられたその知のあり方は、むしろ今日の新しい「知」の組織化のあり方を先取りしているようにも思われる。

4. おわりに

最後に「取り残されている」農林経済学者ということに対する、アフリカからの発言として、「価値の転換」ということにかかわる、報告者にとっては思い出深い、次のような話をさせていただくとともに、それとの関連で21世紀の農林経済学への期待を話させていただき、本報告を締めくくる。それは「豊かさ」を計る笑度計というものについてである。その話のきっかけは、鳥取大学農学部の津野教授とザイル（現コンゴ民主共和国）のザイル河を調査団で下っていたときのことである。そこには福井県立大学初代の学長、坂本慶一先生、また現在の福井県立大学の学長、祖田修先生などのそうそうたるメンバーがいて、当時大学院生だった私は鞆持ちという感じで加わっていた。津野先生は世界の各地で研究されてきた作物学者であったが、私に次のような質問をされた。

「杉村君、アフリカは貧しいことになっているが本当だろうか。」「どうしてそのように思われるのですか。」「僕は世界の各地を回ってきたけど、こんな笑顔をしている人たちを見たことがない。こんな笑顔をしている人たちを「貧しい」ということができるだろうか。それがきっかけになって、調査団の中で、アフリカの「貧しさ」やその一方でその中にある一つの「豊かさ」が話題となった。

そしてそこで生まれてきたのが、笑度計という面白い道具であった。アフリカ、日本、ヨーロッパ……、どこの地域でもいいが、それぞれの場所で生きる人の「幸福度」を、「どのくらい腹の底から笑っているのか」というような尺度から比べられるよう

な道具を作ってみたらどうだろうかという提案であった。津野教授をはじめ、一緒に調査旅行をしたメンバーの出した結論は、アフリカはかなり笑度が高いだろう。少なくとも日本よりは高いのではないかということになった。

日本の中で新しい学のミッションが求められているといわれるとき、私がいつも思い出すのは、この「笑度計」のことである。このような「笑度計」の中に認めることのできる「豊かさ」のありかを、今直ちに指標化することはできないとしても、そうしたもう一つの「指標」の可能性を手放さずに語り継ぎながら、手探りであっても、自分たちがとらわれたパラダイムを超え、その外へ出て行こうとする努力が、今重要なのではないか。〈アフリカ小農世界〉からも学び、そこに双方向的な対話の場を作り出す、そのような学の営為の中に、21 世紀の「農林経済学」のミッションの一つがあるのではないか。

それとともにこのことは、農業・農村現象が展開する現場とともに歩き、そこから学ぶという応用の学としての〈農林経済学〉の出発点の志に立ち戻ることをも意味していると考え。農林経済学の一つの伝統の中には、そもそも研究の対象の純化した対象化と囲込みではなく、対象そのものが物言いをするという面白い習いがある。「先生の言っていることは無意味ですよ」と農業者から言われると、そこに標を正す大先生がいた。そこから新しい学が始まるはずであり、そこに新しい可能性があるのではないか。農業・農村現象の中に、多数の都市民も加わる今日、こうした伝統を農林経済学者の営みの中に復権して、他の学に先駆けて、21 世紀における学問の「地域貢献」「社会貢献」の真の意味を照らし出す、高い「笑度」をもった学へと回復してほしいと願っている。

注 1) このような農業・農村をめぐる新たな現代的状況と「学」の間の乖離はあまりにも大きいといえる。こうした状況は、本学会の第 51 回大会の共通課題「ライフスタイルの転換と地域農業」の報告の中で、座長の秋津氏が以下のような形でまとめていることとも重なる。「圧倒的多数を占める都市住民は、今、農業や農村を組み入れた新しいライフスタイルを求めつつある。農業の側においても、それに対応した新しい農業のかたちを創造することが、現在の隘路を抜け出す有力な道なのではないか。いや、実際の農業者の中には、都市住

民の動きに呼应し、時には、先行しながら、すでに農業者としての新しいライフスタイルを創造している例も少なくない」と取り残されているのは、むしろ研究者かもしれない。秋津元輝, 2002, 163 ページ。

- 2) クーン, 1971.
- 3) 平野, 2000, 43 ページ.
- 4) ハイデン, 1983, 8 ページ.
- 5) サーリンズ, 1984, 232 ~ 236 ページ.
- 6) 杉村, 2004, 397 ページ.
- 7) 杉村, 1994, 500 ~ 502 ページ.
- 8) 上山春平, 1966.
- 9) 昨年, タンザニア・ダルエスサラーム大学で行われた第 2 回の「アフリカ・モラル・エコノミー」に関する国際シンポジウムでは、環境とアフリカ・モラル・エコノミー、内発的発展とアフリカ・モラル・エコノミーが一つの論点となった。
- 10) チェンバース, 2000.
- 11) 西川, 2000.
- 12) アマルティア・セン, 1989.
- 13) 1972 年, ブータン国王が提起した考え方.
- 14) 塩見, 2003. 宇根, 2006. Woof, 2003.

参考文献

- [1] 秋津元輝『座長解題『ライフスタイルの転換と地域農業—21 世紀の地域農業を展望する』』、『農林業問題研究』第 145 号, 第 37 巻・第 4 号, 2002.
- [2] Chambers, R., 野田直人, 白鳥清志監訳『参加型開発と国際協力』明石書店, 2000.
- [3] クーン, T.S., 中山 茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 1971.
- [4] 平野克己『図説アフリカ経済学』日本経済評論社, 2002.
- [5] Hyden, G., *Beyond Ujamaa in Tanzania—Underdevelopment and Uncaptured Peasantry* (London: Heinemann, 1980).
- [6] Hyden, G., *No Shortcuts to Progress: African Development management in Perspective* (London: Heinemann, 1983).
- [7] 西川 潤『人間の経済』岩波書店, 2000.
- [8] サーリンズ, M.D., 山内 昶訳『石器時代の経済学』法政大学出版局, 1984.
- [9] 杉村和彦『共食に生きる理性』福井勝義等編『文化の地平線』世界思想社, 1994.
- [10] 杉村和彦『アフリカ農民の経済』世界思想社, 2004.
- [11] スコット・ジェームズ・C, 高橋 彰訳『モラル・エコノミー』勁草書房, 1999.
- [12] セン, A., 大庭 健, 川本隆史『合理的な愚か者』勁草書房, 1989.
- [13] 上山春平『社会編成論』川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平編『人間—人類学的研究』, 1966.
- [14] 宇根 豊『国民のための百姓学』家の光協会, 2006.
- [15] Woof 日本『泥だらけのスローライフ—自分さがしの農の旅』実業之日本社, 2003.